平成７年度

中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査概報 III

具同中山遺跡群II－１

1996年３月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は中村宿毛高規格道路建設計画に伴い平成７年度に実施した具同中山遺跡群Ⅱ－１発掘調査の概要を記録したものである。

2．本調査は建設省四国地方建設局からの依頼を受け、高知県教育委員会が受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査を実施した。

3．具同中山遺跡群は高知県中村市具同に所在する。発掘調査は平成７年５月から11月まで実施した。

4．発掘調査は次の体制で行った。

総　　括－財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター所長　原　雅彦

総　　務－同総務課長　田岡英雄・同主幹　吉岡利一・同主事　石川馨

調査担当－同主任調査員　松田直則・同　伊藤強・調査員　山崎正明・調査補助員　竹村三菜

5．本書の執筆・図版作成及びレイアウトは各担当者が分担し、編集は伊藤が行った。

6．出土遺物等の資料は、高知県埋蔵文化財センターにおいて保管し現在整理中である。

本文目次

第Ⅰ章　調査に至る経過 …… （伊藤） …… 1

第Ⅱ章　高知県及び遺跡の環境 …… （山崎） …… 2

第Ⅲ章　調査の方法と基本層序 …… （伊藤） …… 6

第Ⅳ章　調査の成果

1．検出遺構

第Ⅲ層検出遺構、第Ⅵ層検出遺構、第Ⅵ’層検出遺構 …… （竹村） …… 8

第Ⅸ層検出遺構 …… （伊藤） …… 10

2．出土遺物

弥生時代 …… （山崎） …… 12

古墳時代 …… （伊藤） …… 18

第Ⅴ章　ま　と　め …… （松田） …… 22

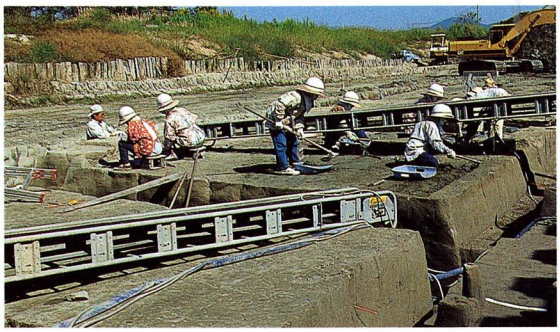
第Ⅰ章　調査に至る経過

中筋川流域には、本遺跡を始め古墳時代を中心とする遺跡が数多く所在している。特に昭和60年度からの河川改修工事に伴って、数次にわたる埋蔵文化財の発掘調査が行われており、県西部の歴史を解き明かす上での重要な資料が蓄積されてきた。

高知市から中村市を通り愛媛県へ続く国道56号線は、県中央部から西部を巡る大動脈である。特に中村宿毛間については、県西部の主要地域を結ぶ幹線道路として、重要な役割を果たしてきた。しかし近年、流通構造や人々の生活の変化、それに伴う交通量の増加により、渋滞は増す一方で深刻な問題となりつつある。その中で建設省四国地方建設局中村工事事務所は、県西部主要地域間の渋滞を緩和し、人や物資の輸送を円滑に行うため、高規格中村宿毛道路の建設計画を進めている。さらに、具同地区に関しては、高知県による県道中村下ノ加江線の計画も同時に進められている。

計画路線の範囲には、中筋川流域における最も広範な遺跡である、具同中山遺跡群の所在が確認されている。高知県教育委員会は、計画路線にかかる埋蔵文化財包蔵地の保護について、建設省四国地方建設局中村工事事務所と協議を重ね、道路敷設計画においては極力遺跡を避けることを要請してきた。また、路線変更が不可能な埋蔵文化財包蔵地については、平成３年度から高知県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施してきている。

今年度調査対象地区については、平成５年度に試掘調査を行い、その結果古墳時代の土師器等を確認した。以上の成果に基づき、建設省四国地方建設局中村工事事務所・高知県及び、高知県教育委員会が協議した結果、具同中山遺跡群Ⅱ－１として発掘調査を実施することで合意した。平成７年４月１日付けで委託契約を締結し、調査は高知県教育委員会が受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターがこれを実施した。



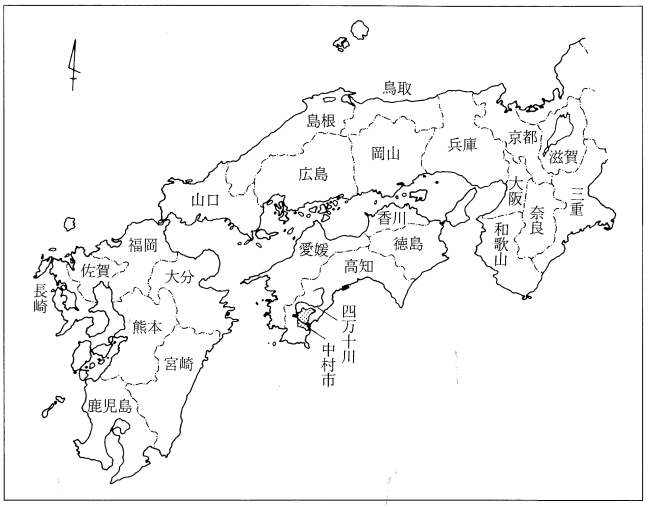
発掘調査風景

トレンチ開削

第II章　高知県及び遺跡の環境

1．高知県の概要及び地理的環境

土佐国高知県は北を急峻な四国山脈に，南は太平洋に囲まれた地形を呈し、古来より遠流の地として知られているように、ともすれば物流の遮断されやすい要素を持っている。現在も交通問題・人口の都市集中化現象・地方や山間の過疎化・高齢化社会・産業の立ち後れ等さまざまな課題を抱えている。しかしながら、21世紀を迎えようとしている今日、本州－四国を結ぶ大橋の開通・高速道路や港の整備・高知空港の拡張計画等が図られ大きく変貌を遂げようとしている。



第Ｉ図 高知県及び中村市の位置図

また、知事によって「新いなか主義」や「情報維新」が唱えられ、地域の活性化が目指されている。半面、開発に伴い多くの重要な遺跡が次々に失われ、大きな損失となっている。また、現代社会の抱える諸問題は年を追って深刻化しており、私たちの未来や、人間の持つ生活の本質とは何かが、現在問われようとしいてる。

高知県は東西に600km以上の海岸線を有し、その形は恰も扇をひろげた地形を呈している。その海岸線を大きく見ると、地殻変動の結果、両サイドの室戸岬・足摺岬では土地が隆起して全国的にも有名な海岸段丘が発達している。一方、中央部の高知平野では土地が沈降して、低くなっている現象が見られる。これは、プレートテクトニクス理論による、フィリピン海プレートが南海トラフに沈み込む際の圧縮に伴うエネルギー（繰り返される南海大地震）による結果である。浦戸湾から浦ノ内湾・須崎湾・久礼湾・興津から佐賀にかけてはリアス式海岸が発達しており、天然の良港が多く形成されている。県西部に沈降海岸が多いことを示している。また、県の両端部の宿毛湾や甲浦湾にもそれが見られ、豊後水道や紀伊水道を挟んだ他地域との出入口としての機能を果たしてきた。一方、県境から海岸線までの南北の幅は約30kmと狭く、県域の79％が山地という数字が示すように、平野は各河川の河口部にわずかにしか存在しない。従って高知県は海洋県であると同時に山岳県でもある。地質構造的には、嶺北地方に三波川帯が、県の中央部に秩父帯が、県の中央部南縁及び東部と西部に四万十帯が広がっている。これらは、御荷鉾構造線，仏像構造線，中筋・安芸構造線と呼ばれる断層によって画されており、南に位置している四万十帯の形成年代が最も新しい。気温は黒潮が流れる太平洋側と標高の高い県境側では格差があり、降水量も内陸山間部に顕著である。このような条件のもとで、人々は古来よりそれぞれの自然環境・社会環境に溶け込んだ生活を展開し、自ずとそれぞれの地域で独特の生業・産業・風習・祭り等が営まれ、固有の文化が生み出されてきたのである。

2．高知県の歴史的環境

県下における遺跡の発掘調査は年々増加の一途を辿り、大規模調査も行われ始めている。ここでは、近年の調査成果を中心に、県内の遺跡を各時代毎に概観してみたい。人々の生活（遺跡）は、地理的要因によって左右される場合が多く、主に先述の地形的特色に合った遺跡分布を示す。

旧石器・縄文時代

県内の旧石器時代の遺跡は、段丘上を中心に10ケ所前後が分布しているだけで、その数は非常に少ない。しかし、新たに県西部でナイフ型石器等が確認されはじめている。縄文時代の遺跡は、従来県下の７割近くが県西部に集中していた。しかし発掘調査の増加により、中央部でも縄文遺跡が河岸段丘上や丘陵の谷間，さらには沖積平野の深いところからも見つかっている。特に近年注目を集めているのが本山町の松ノ木遺跡で、1992年の発見以来５次にわたり調査が行われ、その出土遺物の量・内容共に西日本でも屈指のものとなっている。近年調査が行われたものを見ると、中央部では柳田遺跡（後期・晩期），林田シタノヂ遺跡（後期・晩期），栄エ田遺跡（後期・晩期），奥谷南遺跡（前期・中期）があり、西部では国見遺跡（中期・後期），船戸遺跡（後期・晩期），十川駄場崎遺跡（早期～後期），木屋ケ内遺跡（早期・前期）がある。また、山間部では松ノ木遺跡（主に後期），北川遺跡（後期）と圧倒的に後期から晩期にかけての遺跡が多い。

弥生・古墳時代

弥生時代の遺跡は、何といっても拠点的母村集落と言われる田村遺跡が著名である。遺構出土の一括資料や水田遺構は、多くの研究者から注目されている。西部では縄文晩期土器と遠賀川土器とを伴出した入田遺跡が知られている。集落は、全般的に前期末と後期後半に増加する傾向にあるが、特に県中央部の洪積台地上において、後期終末のタタキ目をもつ土器群が住居址から多く出土している。当該期における住居址数は優に100棟を超す勢いであり、社会構造の変化・鉄器の普及等を窺い知ることができる。まさに古墳出現前夜の一様相と言えよう。また、弥生終末～古墳初頭の集落が山間部において見つかり始め注目されている。古墳時代の集落の分布は全般的に少ない。しかし、中村平野の後川・中筋川流域の河川祭祀跡は大規模で全国的にも有名である。この中筋川水系上流に県下では唯一の前方後円墳である曽我山古墳が確認されている。このことは文化流入の門戸であった事と同時に、波多国における大和政権下の国造を想定する要因になっている。他に土佐山田町で確認された四国最大の方墳である伏原大塚古墳などもあるが、ほとんどは「小円墳，横穴式石室，群集」といった特徴をもつ後期古墳が中央部の山麓部を中心に分布している。

奈良・平安時代

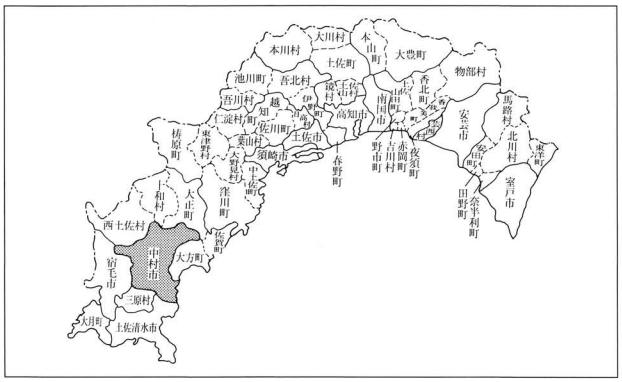
古代に入り律令国家体制が整うと、国郡制が定められ、土佐国の歴史の主要舞台は高知平野に移る。文献上からすると郡衙は、初め安芸，土佐，吾川，幡多の４郡が設置され、その後高岡，香美，長岡が加えられている。また、各郡にはいくつかの郷が成立している。南国市比江にある土佐国府跡の調査が1979年から継続的に行われている。第11次までの調査の結果、内裏・国庁・国庁前といった小字が示すような遺構は検出されておらず、今後の調査に期待が持たれている。しかしながら、方形の柱穴をもつ掘立柱建物跡や緑釉陶器，硯，墨書・刻書土器などは土佐国府跡の歴史的変遷を知ることができる。他にも野市町や土佐山田町等で郡衙などの官衙跡やそれに関連するものと

考えられる遺跡が数例確認されている。それ以外にも国分寺跡や比江廃寺跡といった重要な遺跡の調査も行われている。併せて調査結果の報告を待ちたい。

鎌倉・室町～江戸時代

中世においては山城の調査例が圧倒的に多い。長宗我部元親の最後の拠城である浦戸城跡や、土佐七守護の一人といわれる津野氏の居城である姫野々城跡等は注目を集めた。芳原城跡，二ノ部城跡，扇城跡，江ノ古城跡，ハナノシロ城跡，曽我城跡等は、地域の在り方，地域の中心人物や城の目的や機能性，更にはその勢力等の関連を探る上で重要な成果を挙げている。主に15世紀後半から16世紀前半の遺物が多いようである。中村市の具同中山遺跡やアゾノ遺跡等では集落の変遷を追うことができる。物資の流通や南海大地震（1498年）の噴砂跡等多くの情報を与えてくれた遺跡でもある。他に特筆すべきものに、佐川町の岩井口遺跡がある。13世紀に成立した在地領主のものと考えられる館跡で、２条の溝に囲まれて、17棟の掘立柱建物跡が検出されている。近世では、高知市の鹿持雅澄邸跡や安芸市の五藤家屋敷跡といった、云わば特別な調査例だけであったが、高知城や小籠遺跡並びに永田遺跡等の調査が進み、県中央部において資料が増えはじめている。南国市の奥谷南遺跡においては17世紀中頃の儒墓が確認されている。全国的にも調査例の少ないものであり貴重である。

３．具同中山遺跡群及びその周辺

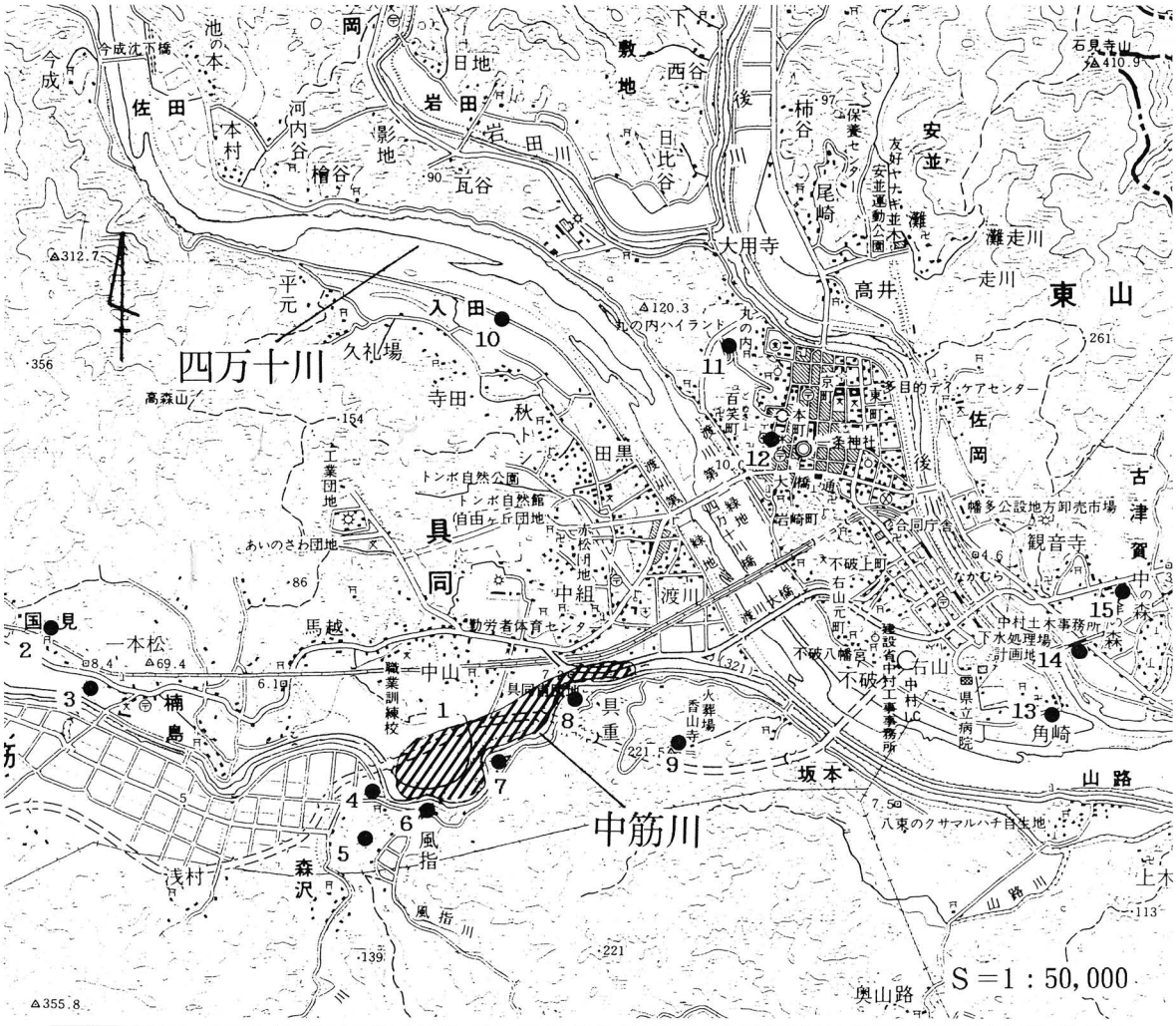


第２図 高知県の各市町村

当遺跡は、中村市具同の中筋川左岸一帯に広がる、古墳時代の祭祀跡を中心とした複合大遺跡群である。絶対位置は、北緯32度－58分－19秒，東経132度－54分－48秒で、遺跡周辺から河口までの距離は約11kmである。本来の四万十川と中筋川の合流点付近の沖積平野に位置する。ここは蛇行する中筋川によって形成された自然堤防地帯であり、自然堤防と氾濫源から構成されている。河川の増水・氾濫時には、河道の両側に砂・シルトが堆積し自然堤防が形成される。その背後の後背湿地も、氾濫時に堆積するシルト・粘土から成る。通常、下流の沖積平野は豊水地であり、反対に水の害のほうが怖い。従って、自然堤防上に集落を形成し、水はけの悪い後背湿地は水田として利用される事が多い。この人々による土地利用の公式は昔も今も変わらず、遺跡周辺はその景観を留めている。中筋川流域に広がる一連の遺跡は、この立地条件のもとに分布している。

四万十川は、不入山に源を発し、人々の生活を潤し土佐湾西部に流入する。下流の中村市では中筋川，後川を合せる。延長196kmを誇り、県下最大の河川として知られている。河口部は三角江（エスチュアリー）になっており、古来より交通が栄えている。日本最後の清流と言われ、青海苔類の生産、鮎・鰻等の漁獲高は全国の河川中で有数であり、人々への恩恵は計り知れない。一方、中筋川は、白皇山に源を発し宿毛市と三原村の境界をなしたのち平田で中筋平野に入り、東に向き

を変え、平野内を蛇行しながら四万十川へと向かう。流路延長36.4kmの間にはいくつもの支流が合流しており、当遺跡の付近でも森沢川・風指川が流れ込む。中村の地はこれらの河川によって形成され、人々の生活もそれに支えられてきた。反面、多くの文献や人々の伝承が示すように、県下でも屈指の洪水地帯であった。多くの水害についての問題は、中村市の歴史を語る上で看過できないものである。この主な理由として上流域と下流域の降水量の差，河川の高低差，河川の曲流等を挙げる事ができ、江戸期以来、長い歴史の中で様々な方策が講じられてきたところである。特に中筋川下流域では四万十川からの逆流により冠水が顕著であり、中村の人々の歴史はまさに水との戦いの歴史であったと言っても過言ではない。こうしたことからも解るように、当遺跡の主な性格は、古墳時代洪水に悩まされていた当地の人々が、荒ぶる神として「川」を崇拝の対象とし、祭りを行った河川祭祀跡であると言える。時間が流れて21世紀を迎える現在、自然（四万十川等）との共存が叫ばれている中、これらは、未来に向けて私たちが如何にあるべきかについての示唆に富むひとつの証である。



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	具同中山遺跡群	縄文～中世	6	風指遺跡	弥生･平安･中世	11	中村(為松)城跡	中世
2	国見城跡	中世	7	アゾノ遺跡	中世	12	中村貝塚	縄文
3	国見城跡	縄文～古墳 中世・近世	8	貝重遺跡	古墳	13	角崎遺跡	古墳・中世
4	船戸遺跡	縄文・古墳 ～中世	9	香山寺跡	中世・近世	14	古津賀遺跡	古墳～中世
5	森沢城跡	中世	10	入田遺跡	縄文・弥生	15	古津賀古墳	古墳

第３図 具同中山遺跡群及び周辺の遺跡

第Ⅲ章　調査の方法と基本層序

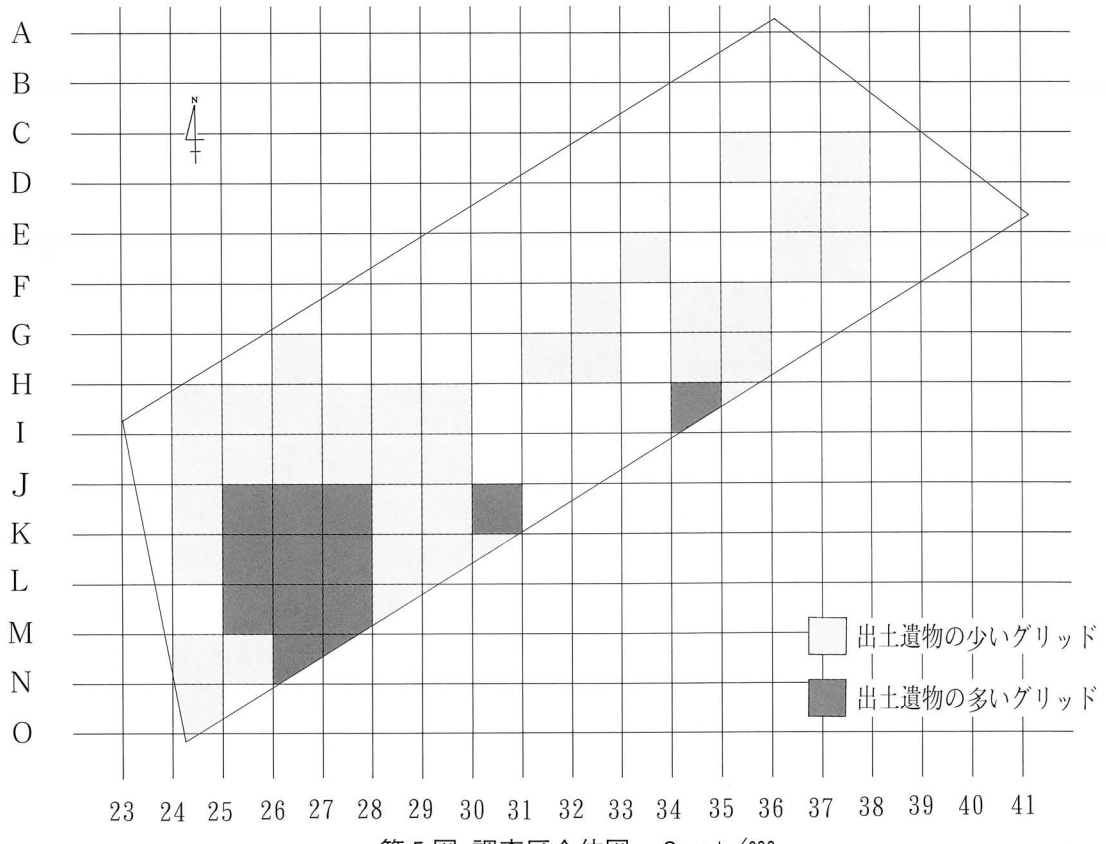
1．調査の方法

本年度の調査対象面積は2028㎡、調査区西辺、南辺が道路に沿っており、崩壊を防ぐために鉄製矢板を設置した。調査区北辺、東辺に関しては勾配約30度の緩斜面に留め、木の端材を仮設して土留めとした。また、調査区周辺に四級基準点を３点設定し、公共座標に沿って調査区内のグリッドを組んだ。

表土及び第Ⅱ層を重機を用いて除去した後、層序確認のため調査区西部中央にトレンチＡを、調査区北端にトレンチＢを開削、また降雨の場合かなりの湧水が予測されるので、調査区北西角に６インチ水中ポンプを設置した。

包含層は縦横にトレンチを開削し層序確認の後、手掘りで削除に当たる。出土遺物は写真撮影の後、光波取り上げシステムを用いて、地点

第４図 調査区位置図　Ｓ＝１／10000



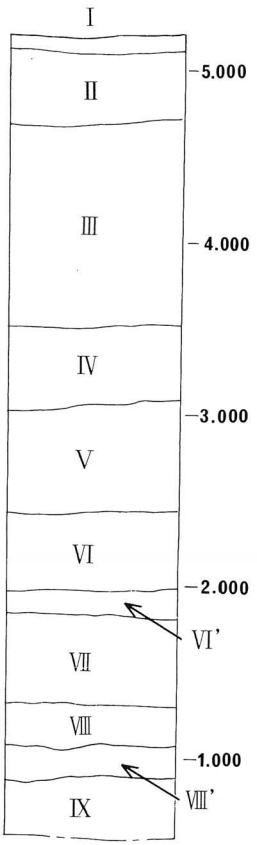
第５図 調査区全体図　Ｓ＝１／600

を測量し取り上げる。遺構は写真撮影の後、光波システムによって基準点を設定し、平面図、断面図を作成した。調査区東部の遺物の分布を見ない場所は、重機によって掘り下げた。

X層（泥炭層）まで掘削した後、最終確認の為トレンチを開削、遺物のないことを確認する。完掘状況、遺跡周辺の様子等については航空撮影を行い、調査を終了し埋め戻す。

2．基本層序

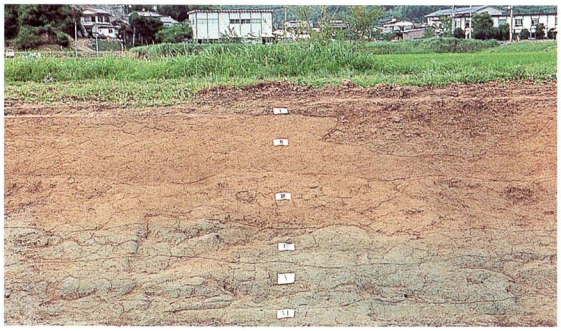
I層からV層までは調査区北壁で確認、VI層からX層については調査区中央に開削したCトレンチで確認した。II層は、酸化鉄分を多く含む。III層からは古代、IV，V層からは古墳時代の人工遺物が出土している。また、V層は少量の炭化物を含む。VI，VI'層からは弥生時代の人工遺物が出土しており、VI'層は炭化物を多く含む。IX層においても、弥生時代の人工遺物が出土している。



I層　表土・耕作土
II層　青灰色粘質土層
III層　褐色粘質土層
IV層　オリーブ灰色シルト層
V層　暗オリーブ灰色シルト層
VI層　オリーブ灰色シルト層
VI'層　オリーブ黒色シルト層
VII層　暗オリーブ灰色粘質土層
VIII層　オリーブ黒色粘質土層
VIII'層　暗オリーブ黒色粘質土層
IX層　暗灰黄色粘質土層

第6図 基本層序柱状図

北壁　堆積層断面



東壁　堆積層断面

Cトレンチ断面

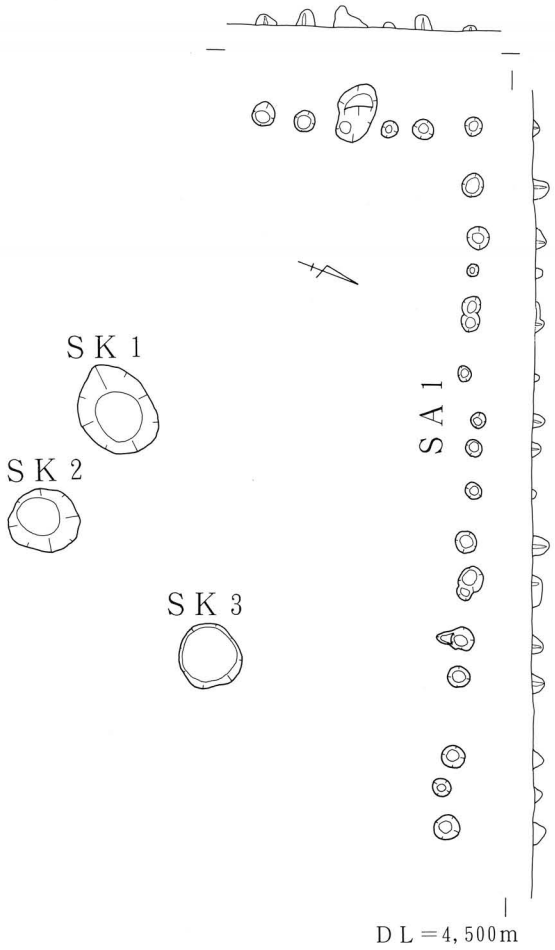
第Ⅳ章　調査の成果

1．検出遺構

(1)　第Ⅲ層検出遺構

ＳＡ１

調査区南西部のＪ－25～27区の掘り下げ段階で検出した。21基の柱穴から形成され、Ｌ字状を有している。東西に7.5m、南北に2.2mを測る。中間寸法は最長で85cm、最短では28cmであるが、40～55cmを測るものが多い。柱穴の深さは最も深いもので18cm、浅いものでは５cmを測るが、10～15cmを測るものが最も多い。埋土は単層の暗青灰色粘質土である。Ｐ４～７，９，10，12，14～17，20，21は杭痕が残存しているが先端のみであり、出土遺物は皆無である。



第７図 第Ⅲ層検出遺構　Ｓ＝１／80

ＳＫ１

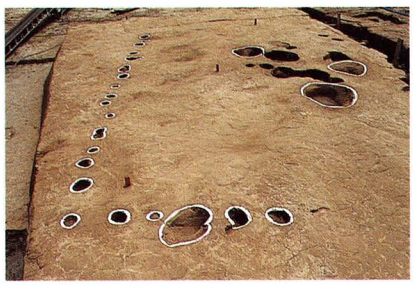
調査区Ｋ－26区の掘り下げ段階で検出した。ＳＡ１の南側に位置する。長径で１m、短径で75cmを測る楕円形を呈し、深さは26cmを測る。埋土はＳＡ１と同じ単層の暗青灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ２

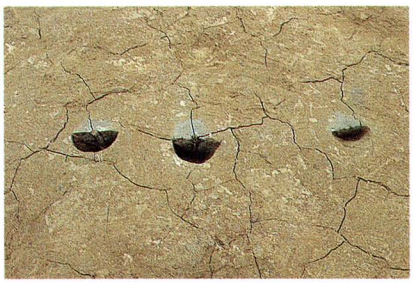
調査区Ｋ－27区の掘り下げ段階で検出した。ＳＡ１の南側でＳＫ１の東隣に位置する。長径73cm、短径67cmを測る円形を呈し、深さは22cmを測る。埋土は同じく暗青灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

ＳＫ３

調査区Ｋ－27区の掘り下げ段階で検出した。ＳＡ１の南側に位置する。長径70cm、短径65cmを測る円形を呈し、深さは19cmを測る。埋土は単層の暗青灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。



ＳＡⅠ．ＳＫⅠ・２・３完掘状況

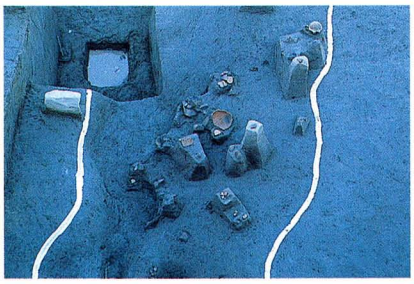


ＳＡⅠ．半裁状況

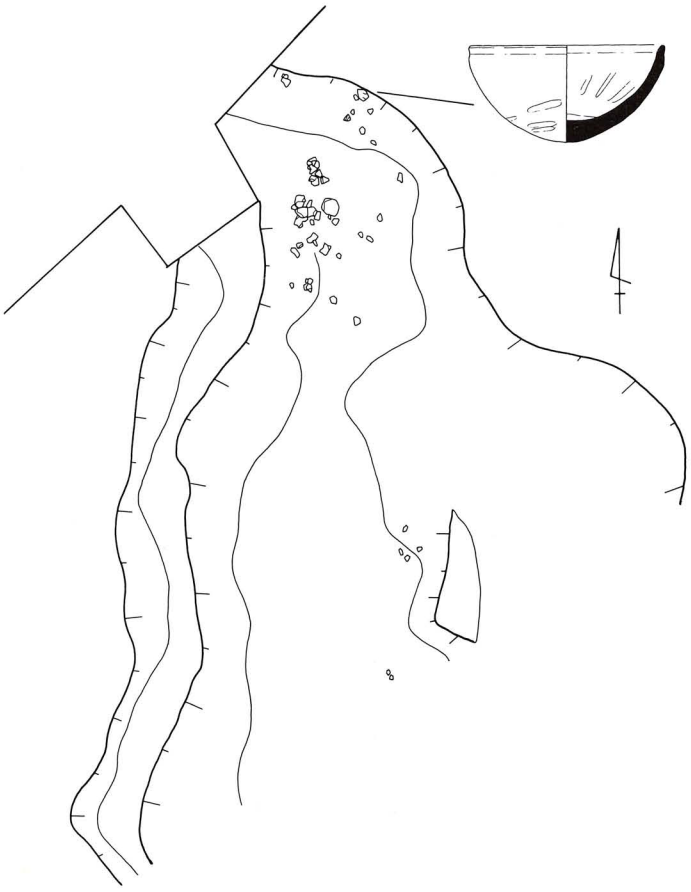
(2)　第VI層検出遺構

ＳＲ１

調査区南西部Ｌ－26～28, Ｍ－27区の掘削段階で検出した。検出した部分は長さ4.6m、幅は5.7m、深さは約１ｍを測る。埋土は暗茶褐色腐植土層である。サブＴＲにより北部は切断されているが、北西部に続くと考えられる。北側から南側（矢板）に向けて深くなっており、流路の本流は南側にあると思われる。出土遺物は小型の鉢や甕の破片等古墳時代の土師器が172点出土している。



ＳＲ１土器出土状況

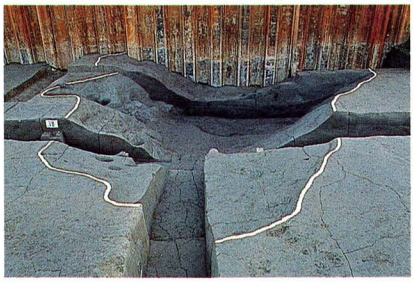


第８図 第VI層検出遺構（ＳＲ１）　Ｓ＝１／60

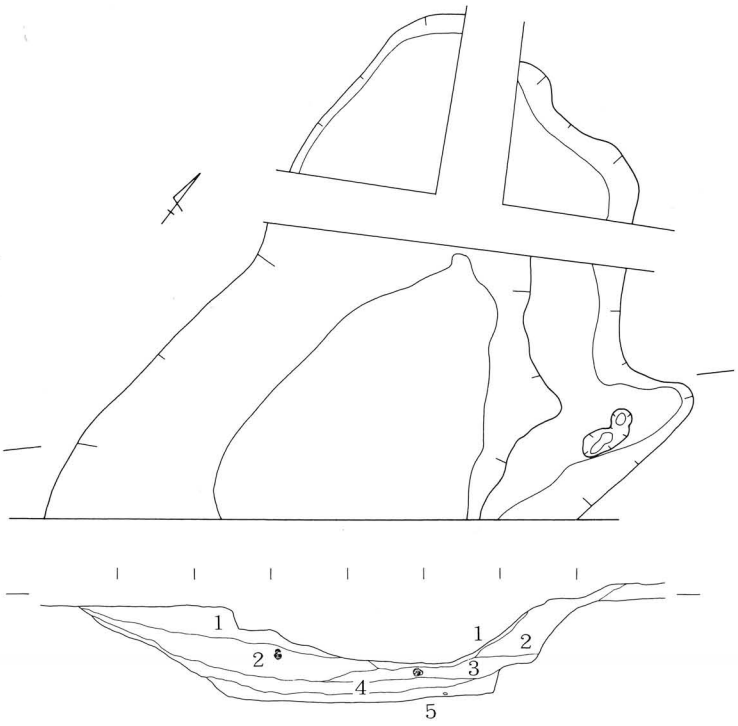
(3)　第VI'層検出遺構

ＳＲ２

調査区南西部Ｌ－26, 27,　Ｍ－26, 27区でＳＲ１の下層より検出した。長さ6.7m、幅は7.6m、深さは約1.4mを測る。埋土はオリーブ黒色腐植土層であるが、木片の混入量で幾層かに分かれる。ＳＲ１とほぼ同じ流れを呈している。また南側に向かって深くなっており、流路の本流は南側に存在すると思われる。出土遺物は弥生土器が337点出土しており、弥生時代の流路と考えられる。



ＳＲ２．完掘状況



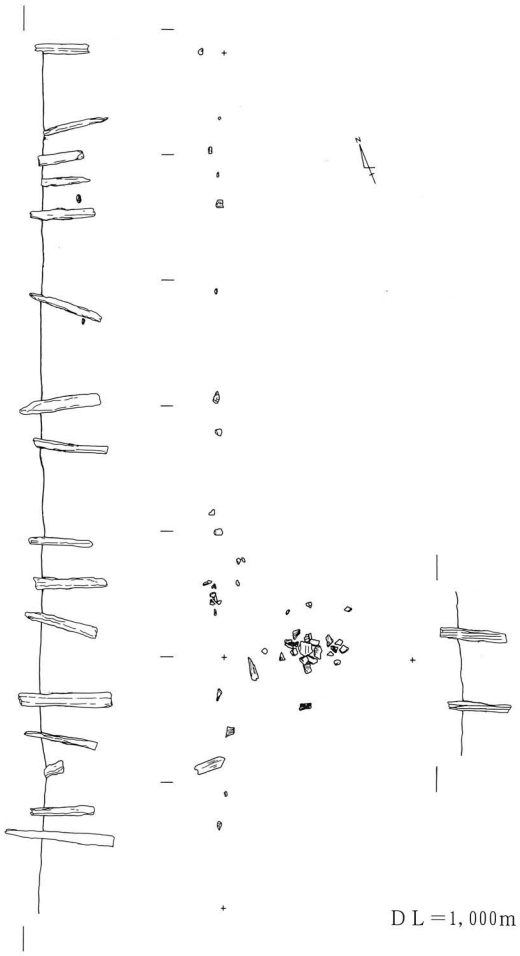
第９図 第VI'層検出遺構　Ｓ＝１／100

(4) IX層検出遺構

調査区北西部において、調査終了前、最終確認トレンチの開削中、杭列を検出した。検出面はIX層上面であり、Ⅰ－26区からH－27区（南西から北東）方向へ２列確認した。１列は0.6ｍにわたって２本の杭をもう１列は6.2ｍにわたって17本の杭を検出した。杭列は北東方向調査区外に続く。

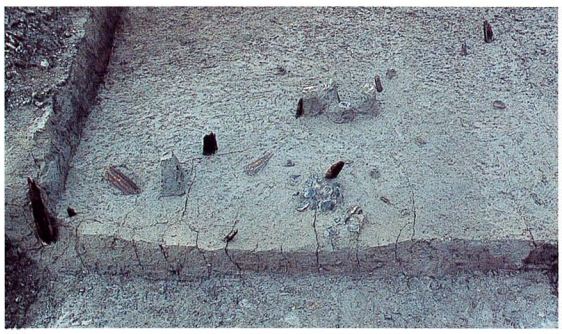
杭は全長18.5cmのものが１本あるが他は40～83cmである。全幅は５cm未満のもの３本、５～10cmのもの14本、10cm以上のもの２本で、ほとんどの杭が幅の広い矢板状を呈している。

また、杭列の付近に数点の土器片を検出した。遺物については後項で触れる。

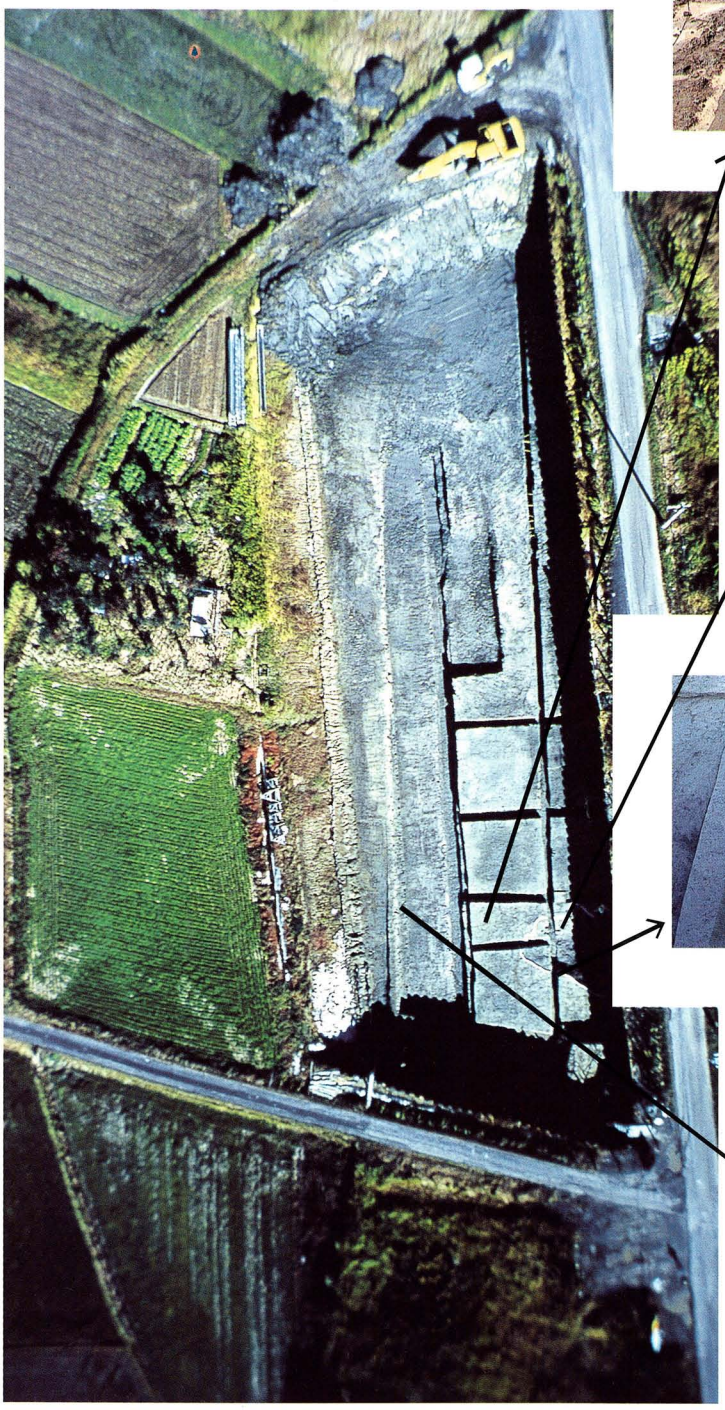


第10図 IX層検出遺構　S＝1／60

IX層杭列検出状況



IX層遺物出土状況



第III層検出遺構

第VI' 層検出遺構

第VI層検出遺構

第IX層検出遺構

検出遺構

2．出土遺物

弥生時代から古代にわたって6624点が出土した。そのほとんどが土師器片で、木製品など土器以外のものは145点を数えるのみである。古代の遺物は細片を主として326点と少なく、現段階で図示できるものはない。弥生、古墳時代については以下、時代毎に述べてゆく。

(1) 弥生時代

(a) 概略

従来、高知県の弥生土器編年は、県中央部の田村遺跡等の多くの資料や先学のたゆまぬ努力・研究の結果、体系化されたものができあがっている。それに対して県西部の土器は、異なった土器文化圏の中での様相を異にした、在地性のつよいものがあることが指摘されつつも、その全体の状況は把握できていなかった。同時に、南四国においては県中央部と西部の２本立ての編年を組む必要があることが早くから指摘され、それがなされてきたところである。その半面、西部における発掘調査例は余りにも少なく、絶対的な資料不足は否めなかった。そのため満足のいく編年作業が進まなかったことは言うまでもない。しかしながら、近年県西部においても弥生時代の発掘調査例が増加し、その資料が蓄積しつつある。今次資料もそうした状況の中での県西部における編年の空白期をうめる貴重なものであり、その意義は大きい。ここ数年の調査成果を見てみると、1994年の具同中山遺跡群からは少量ながら、包含層より縄文晩期終末の土器に伴って弥生前期前半の資料が出土している。また、地点をかえて中期後半の資料が弥生時代の自然流路から出土している。1993年国見遺跡からは、住居址に伴って前期中葉の資料が報告されており、1992年西ノ谷遺跡からは、前期末の資料が報告されている。これらにより当地域におけるある程度の変遷を辿ることができる。

細頸壺 出土状況

（ｂ）弥生中期土器

次にあげる土器群は、主にVI層・VI'層・ＳＲ２出土の土器である。これらは互いに接合関係にあり、一時期を画するものである。約900点という数少ない資料ながら、細頸壺・長頸壺・広口壺等、弥生中期に見られる壺の多様化及び様々な特徴を駆使するバリエーションに富む良好なものであり、以下に13点を抽出した。その文様構成は、土器の系譜や地域間交流等を探る上で有効な指標となり得るものであり、当地域並びに南四国の弥生社会の展開を考える上で貴重なものとなろう。

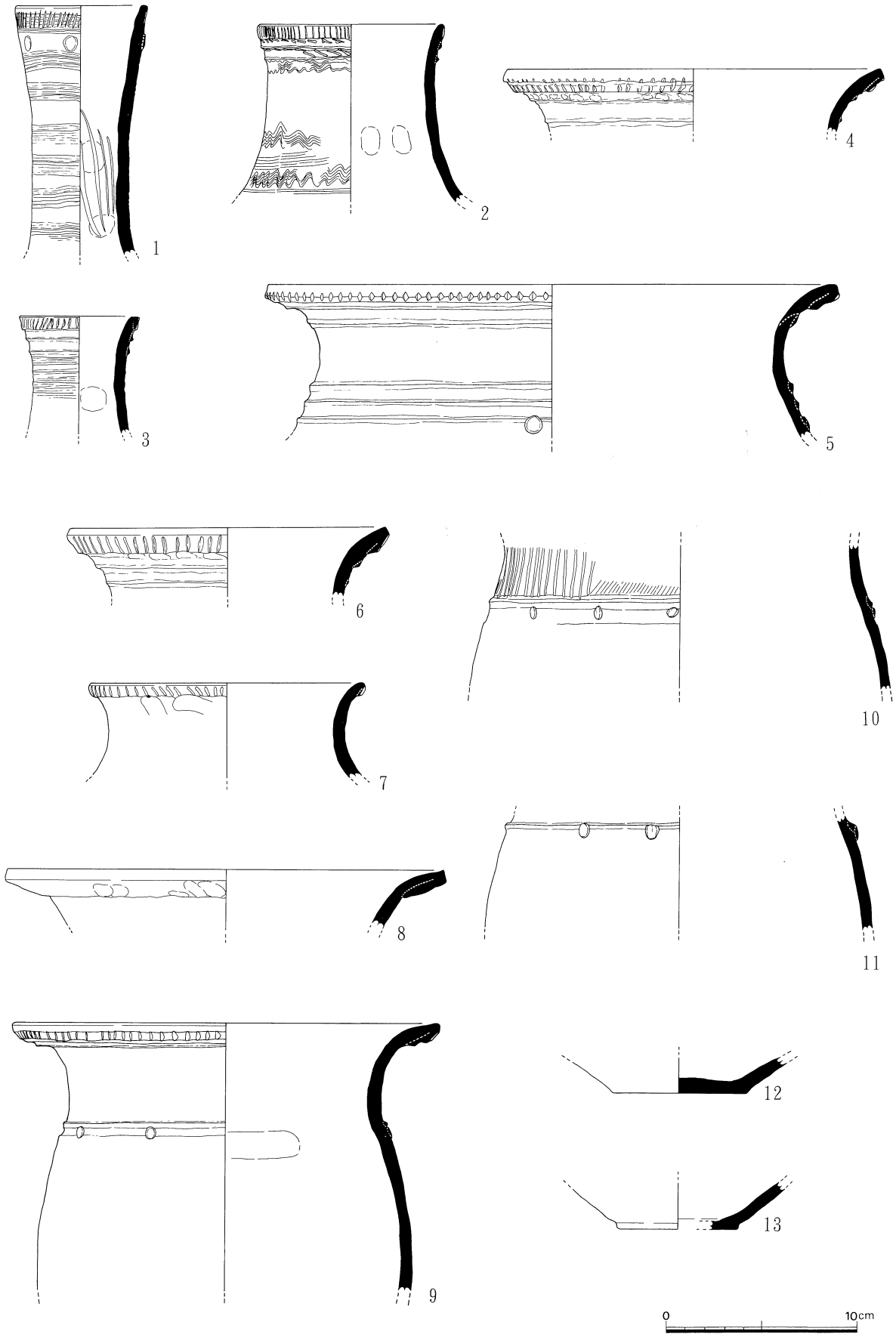
広口壺 出土状況

第11図１～３は櫛描文を駆使して文様を施すことを特徴とする。また、口縁部外面に例外なく篦状原体で刻目を施す。１は頸部に７条の櫛描直線文を施し、１条目と２条目の間には円形浮文を併用する。２は櫛描直線文と波状文を連続させる。１・２は原体が細くて施文が浅く精巧に描かれた感を受けるが、３は施文が深くて文様がやや雑である。刻目を見ると、１は縦長の原体で押圧を軽く行い、２・３については、粘土帯を貼付してやや肥厚させた上に深めに施し、その上を左から右にナデ調整を行う。また、２はその下方に２条の微隆起帯を施し、その間を刺突する。指頭によってつまみ上げられている。３は断面三角形の小突帯状のものを２条施す。

４～８は口縁部に粘土帯を貼付することを特徴とする。口唇端部を面取り、肥厚させた口縁部に刻目を施すことを主とする。また、微隆起帯を併用することが多い。４～６は大きさは異なるが、口縁がラッパ状に大きく広がる。刻目は５のように口唇部の下端に施すものや、６のように貼付した口縁部の全面に施すものがある。また、４のように横方向の強いナデ調整によって肥厚部が凹状をなし、刻目が上下に分かれるものもある。微隆起帯を見ると、４は他のものと比べると、指頭でつまみ出しており細い。一方、５は大きめのものを口縁下と上胴部に数条巡らせ、太い円形浮文を貼付する。断面がシャープな６のようなものもあり、様々な様相を示す。７は表面がやや磨耗しているが、部分的に磨きが確認できる。口縁端部は丸くおさめ刻目も丁寧である。また、胎土も他のものより精選されており、異質な感を受ける。８は2.4cmの幅広い貼付口縁を有する。

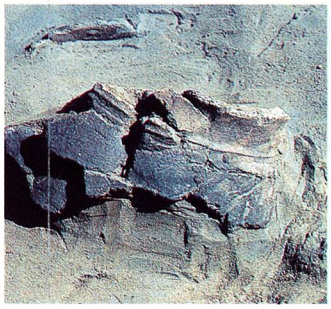
９は土佐型甕の系譜をひくものである。ゆるやかに立ち上がってきた上胴部から大きく外反して口縁部に至る。口縁部は肥厚させ下端に刻目を施し、左から右への横ナデを行う。その下に細い微隆起帯を１条施している。上胴部にも細い微隆起帯を１条施し、その下方に円形浮文を貼付する。上胴部から口縁へかけてはつよいナデ調整を行っており、上胴部で段が生じている。外面は煤ける。

10・11は胴部片である。共に上胴部に微隆起帯を施し、その下に円形・楕円形浮文を貼付する。10は頸部にかけて縦方向の沈線と、左下がりの細い列点文を施す。12・13は平底を呈し、共に外方へ大きく開いていく。13はわずかに突出した円盤状の底部を有する。全体のバランスから言えば小振りである。



第11図　弥生中期土器（1～13）

（ｃ）小結



甕胴部 出土状況

南四国における弥生土器の編年は、田村遺跡の調査以来、良好な資料に恵まれている高知平野を中心とする県中央部・東部を中心に進められている。西部では前期初頭の遺跡として著名な入田遺跡の調査以来、本格的な調査がなされておらず、弥生文化全般にわたって研究が遅滞していた。しかしながら、近年発掘調査の増加により、徐々にではあるが確実に資料の蓄積が見られるようになってきた。例えば国見遺跡[注1]では前期中葉のまとまった資料が出土し、西ノ谷遺跡[注2]からは、前期末葉の一括性の高い良好な資料を多量に得ることができており、西部の様相が少しずつ把握されるようになってきた。今次資料は、これまでほとんど空白であった中期中葉に属するものであり、量的にはあまり恵まれてないとはいえ、重要な資料となった。即ち、県西部の中期の資料としては、これまで前葉に位置付けられる葉山村出土の永野Ⅱ式土器と中期末葉の神西式土器（窪川町・神西遺跡標識）が断片的に知られているに過ぎなかったからである。以下に今次資料の特徴を抽出し、永野Ⅱ式や神西式土器との関係，また中央部との比較を行って、西部地域の弥生文化のあり方を土器を通して明らかにしてみたい。今次資料は、従来より「西の土器」と称されているものであり、非常に在地色の強い土器群である。器種組成は壺と甕からなる。壺は細頸壺と広口壺に大別でき、口縁がラッパ状にひらく広口壺が主体を成す。甕は所謂土佐型甕[注3]の系譜を引くもので、あまり膨らまない胴部から内側に一旦すぼまり口縁部へ大きく外反するタイプである。これらの特徴は粘土帯貼付手法を用いて、肥厚させた上に刻目を施す事や、頸部や上胴部に微隆起帯を貼付する事を挙げることができる。また、頸部から口縁部にかけて横ナデ手法を用いることも特筆できる。これらは永野Ⅱ式[注4]から踏襲したものである。神西式土器の特徴は、（1）貼付口縁に篦による列点文・刻目を施す（2）頸部にかけて櫛描直線文を施す（3）上胴部に櫛描直線文・微隆起帯・円形浮文・円形刺突文を組み合わせる（4）筒状の口縁部に篦による刻目を施し、頸部に円形浮文・微隆起帯を施す等[注5]である。本資料と共通のメルクマールを多く留め、発展形態として捉えることができる。さて、本資料の時間的位置付けを行わなければならない。細頸壺が展開している点，櫛描文を交互に連続させる点，櫛描文の原体が細くて精巧に施されている点，また、貼付口縁を有し、微隆起帯や円形浮文を併用させる点等から、田村遺跡群のＬｏｃ45－ＳＤ２，Ｌｏｃ50－ＳＫ６[注6]等に併行関係を求めることができる。本資料は中期－Ⅱ[注7]（畿内第Ⅲ様式併行）に比定することができ、まさに永野Ⅱ式と神西式を繋ぐ、中期中葉の一括資料と言える。また、本資料と田村遺跡の資料を比較してみると共通点・相違点を幾つか抽出することができる。（イ）粘土帯を貼り付けて口縁部を肥厚させるが、田村の土器が幅広なのに対して本資料は比較的狭い。（ロ）田村は指で押えて貼付口縁を作出するものが多い。それに対して、口縁部周辺をナデ調整する事が多い。口縁部下端の刻目が強い横ナデにより凹状をなし上下に分かれるものや、刻目の上をナデるものさえある。（ハ）田村が比較的長頸なのに対して、本資料は頸部が発達せず全体的に短くずんどうである。（ニ）本資料は微隆起帯を多く用いる等である。これらの特徴は在地における地域色であり、弥生社会が展開していく中での大きな原動力である[注8]。

【注】

(1) 曽我貴行　『国見遺跡』高知県中村市教育委員会　1994年

(2) 出原恵三　『西ノ谷遺跡』高知県教育委員会（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　1993年

(3) 出原恵三　「〈土佐型〉甕の提唱とその意義」『遺跡』第32号　1990年

(4) 岡本健児　『永野遺跡』高知県葉山村教育委員会　1984年

(5) 岡本健児　「神西式土器文化の再検討」『高知女子大学紀要　人文・社会科学編』第20巻　1971年

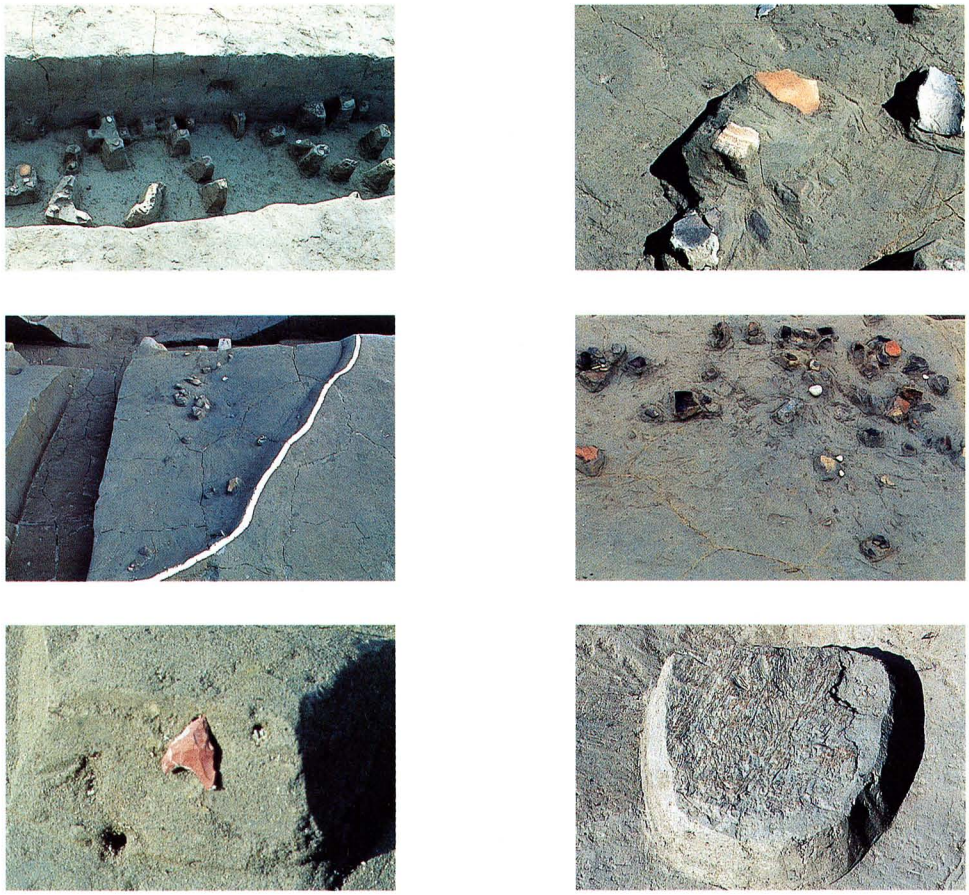
(6) 出原恵三他『田村遺跡群』第５分冊　高知県教育委員会　1986年

(7) 出原恵三　「南四国における弥生中期土器の展開－編年と地域間交流」『遺跡』第31号　1988年

(8) 出原恵三　「〈薄手土器〉の展開とその意義」『南国史談』第７号　南国史談会　1989年

（ｄ）石鏃，木製品

他の遺物についても若干ふれておく。石鏃はVI層出土である。赤色チャート製で、全長1.75cm・全幅1.45cm・全厚0.45cm・重量0.8ｇの完形品である。刃部周辺の剥離は比較的丁寧であるが、全体的には第１剥離面を多く残すなど大雑把なつくりである。基部は弧状にくびれ、脚端部はやや内傾する。ＳＲ２からは、薄い木片を編んだような様相を留める、木製品と考えられるものが出土している。非常に脆くなっており、取上げも困難な状況を呈していた。



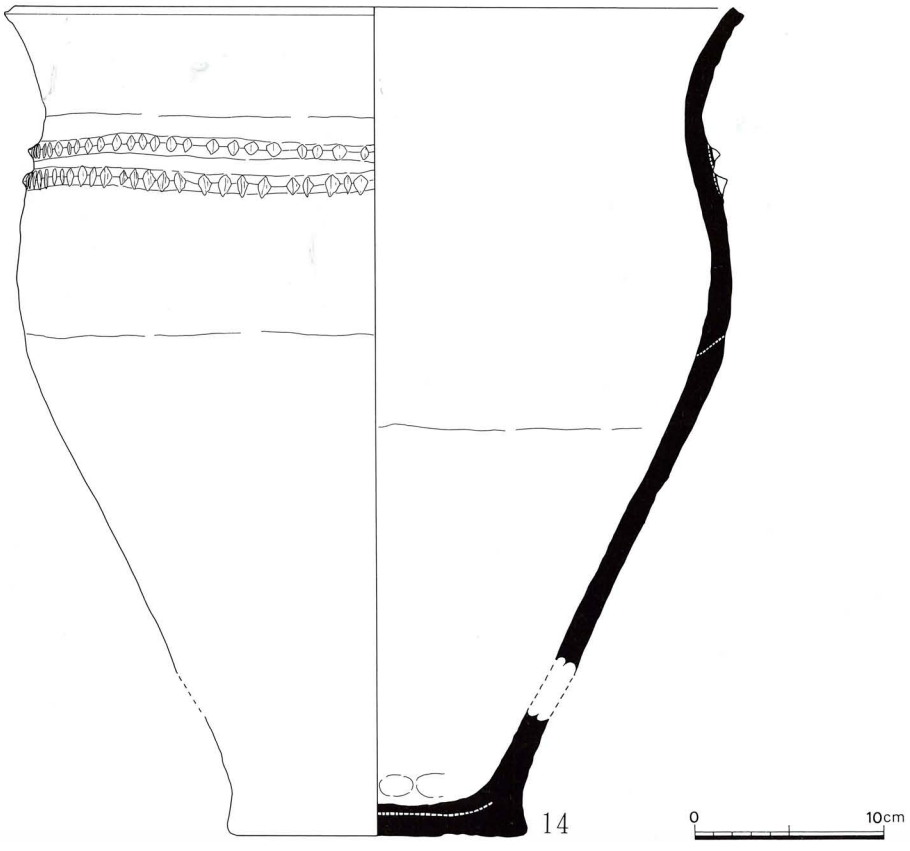
遺物出土状況

（ｅ）弥生前期土器

次の土器（14）は、IX層の遺構（杭列）に伴って出土したものである。上胴部にしっかりした２条の突帯を巡らせ、篦状原体で大きめの刻目を施す。器面調整は、内外面つよい横位圧痕を留めており、底部は平底でやや横につっぱる。また、内傾接合が認められるなど非常に縄文的である。内外面共に煤の付着が顕著で、外面は胴部下半から口縁にかけて、内面は胴部下半から底部にかけて認められる。ただ１点のみの出土であり、その様相は今までに見られなかったものである。しかし、1994年の具同中山遺跡群の調査II区出土の土器に類似相が見られる。（1994年具同中山遺跡群調査II区では、こういった土器と遠賀川土器が伴出している）従って、その時間的位置付け等の判断は何とも言い難いものがあるが、ここでは弥生土器として扱っておきたい。この問題は、今後大きな課題となるものである。また、土壌サンプルを採集しており、プラントオパールの結果も合わせて期待するところである。

IX層杭列及び前期土器

前期土器 出土状況



第12図 弥生前期土器（14）

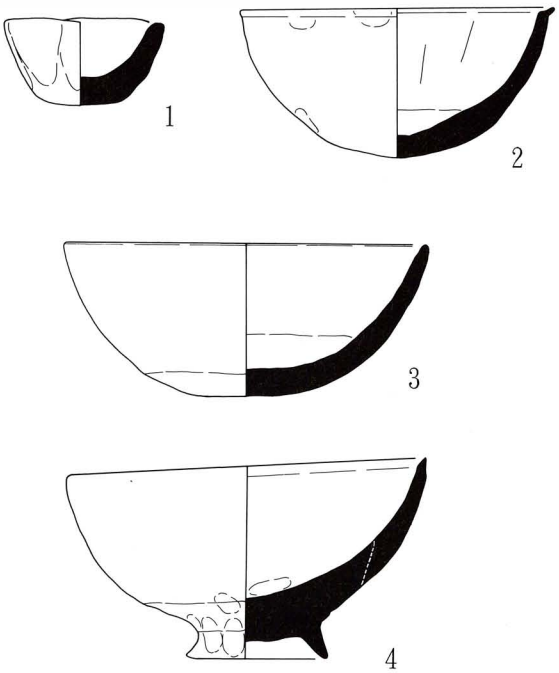
(2)　古墳時代

古墳時代の遺物は、Ⅳ層、Ⅴ層、ＳＲ１にまたがって出土しており、接合関係が認められるものもある。Ⅳ層からは約540点の遺物が出土しており、特に多いのが土師器の甕である。そして若干の須恵器、土師器の高杯、椀があるが、大半が細片で、個体を形成するに至らない。図示できるものとしては手捏ね土器（第13図１）が１点完形で出土しているのみである。Ⅴ層から出土した遺物は、約4400点と本遺跡の遺物総点数の半数以上であり、その中でもⅣ層同様土師器の甕が2272点と多く、次いで高杯206点、そして椀、鉢、手捏ね土器の順である。

第13図２～４はⅤ層出土の遺物であり、２は鉢でやや尖り気味の底部より、口縁はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外反する。内面には煤の付着が見られる。３は椀で平底気味の丸底の底部を持ち、口縁はやや直立気味に立ち上がる。また、４は脚付椀で「ハ」字状に短く開く脚より、体部は丸みを持ち、口縁はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は僅かに外反する。内外面に指頭圧痕が見られる。

Ⅳ層土師器出土状況

Ⅳ層手捏ね土器

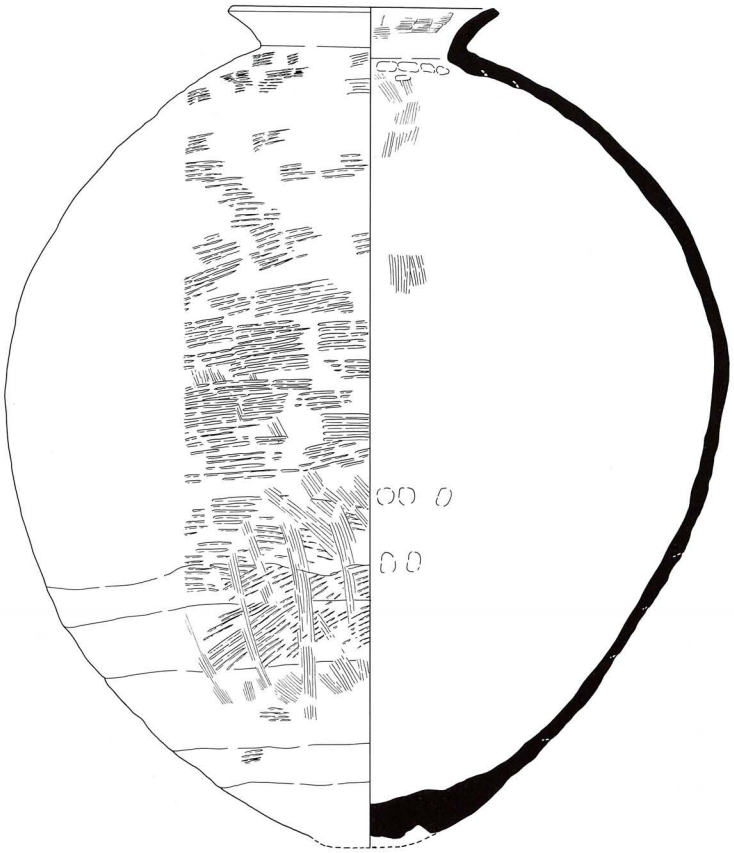


Ⅴ層土師器椀

第13図 Ⅳ層・Ⅴ層出土遺物：復元実測図

（１　Ｓ＝１／２　２～４　Ｓ＝１／３）

Ｖ層出土の遺物の中で、特に目を引いたのが、第14図の土師器の甕で、古墳時代のかなり古い段階のものと思われる。器高67.8cm、胴径57.8cmと、県西部で出土した土師器の中では、最大の部類に属するものであるが、口径は21.6cmと胴径に比べかなり小さい。胴部は丸みを持ち、頸部は強くくびれ、口縁は強く外反する。外面調整は全面に叩きを施し、部分的に縦のハケ調整が認められる。内面は胴部上位にハケ調整痕が見られ、頸部、胴部に僅かに指頭圧痕も見られる。口縁部には横のハケ調整も見られる。この甕は調査区西部中央で押しつぶされたような形で出土したもので、祭祀に利用



第14図 Ｖ層出土 土師器甕:復元実測図(Ｓ＝1／6)

Ｖ層土師器甕

された可能性も大いに考えられ、今後検討する必要がある。

出土遺物の中で最も多かった土師器の甕は、外面に叩き目を持ったものが目立ち、また、外面に煤の付着したもの、内面に食物残滓のあるものも見かけられ、何らかに使用された後、現位置に廃棄された状態で出土しているものと思われる。

Ｖ層土師器甕出土状況

Ｖ層土師器甕出土状況

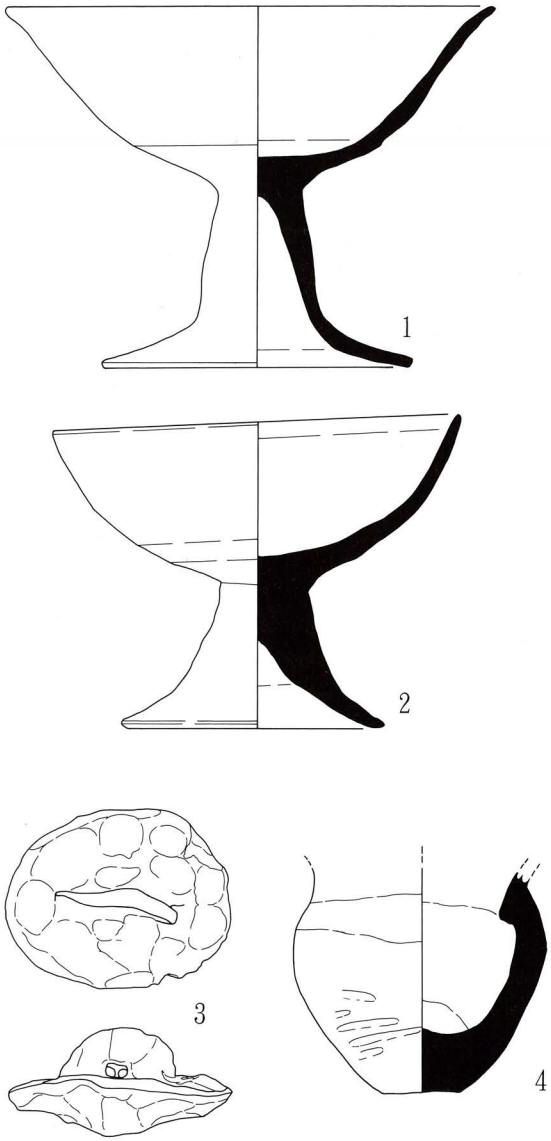
Ｖ層土師器高杯・甕

第15図１、２は土師器の高杯で、１は調査区南西部において土師器の甕を伴い出土した。裾部はやや平坦で、杯底部にやや稜を有し口縁は外反する。外面には丁寧なナデ調整が施されている。このタイプの高杯は、昨年度の具同中山遺跡群Ⅰの発掘調査で、何点か出土している。

２は調査区南西部において完形で出土した。この高杯は土製模造鏡、手捏ね土器と共伴している。杯部は丸みを持ち口縁部が直立気味に立ち上がる。裾部はやや平坦でやや立ち上がる。整形は内外面共にナデである。

３の土製模造鏡も完形で出土。全長4.7㎝、全幅5.95㎝、全厚2.87㎝で楕円形の円盤に紐を有する。紐には孔が二つ穿たれている。整形は全面指頭によるもの。また共伴する手捏ね土器は一部破片のみであった。これらのセットも何らかの祭祀的行為に用いられた可能性が考えられる。

４は甕型の小型土器で、口縁部は欠損する。胴径6.6㎝、底径2.1㎝と小さく、一見手捏ね土器かと思われた。しかし内外面には粘土の接合部も見られるし、外面には叩き目も残っており、小型の土器にしては、かなりしっかりと作られている。



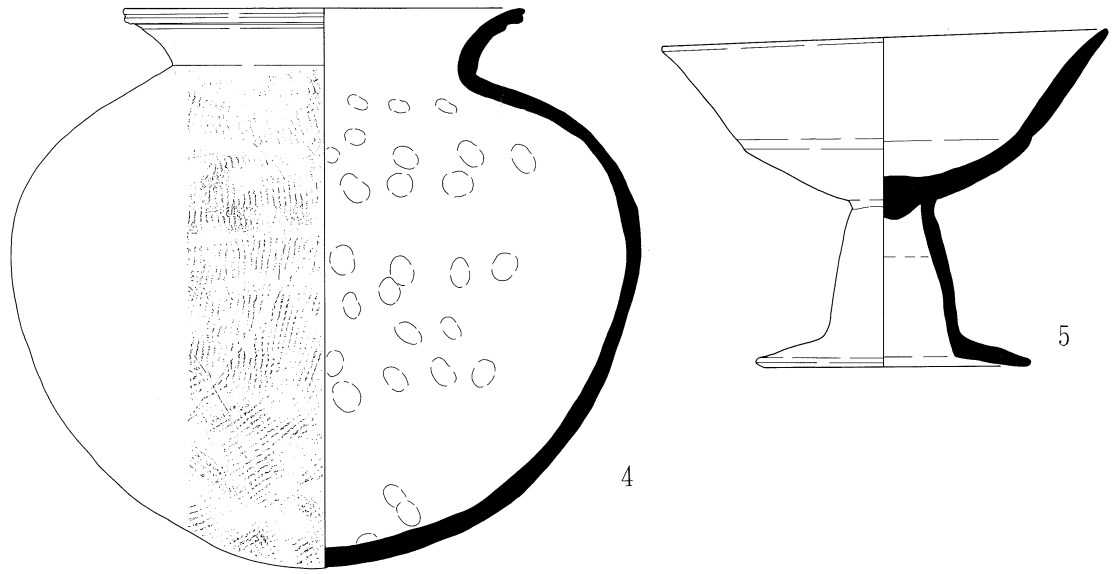
第15図 Ｖ層出土遺物：復元実測図
（１．２ Ｓ＝１／３ ３．４ Ｓ＝１／２）

Ｖ層土師器高杯・土製摸造鏡

第16図１は土師器の甕で、遺物の集中地点とは離れ、調査区の東端に単独で出土している。底部は平底で、胴部には一部叩きの後、全面にハケを施している。Ｖ層出土の中でも、かなり低いレベルで確認された。弥生末から古墳初にかけてのものと思われる。

ＳＲ１からは若干の須恵器と土師器の甕55点、鉢10点を含む約190点の遺物が出土している。ＳＲ１から出土して個体となったのは、現段階では以下の２点の鉢で、２は口径10.8cmとかなり小型の物である。底部は尖り気味で、かなり雑な作りであり、体部外面には叩き整形が施されている。３は口径9.7cmと、より小型になる。やや尖り気味の底部より、やや丸みを持って立ち上がり、口縁は直立気味に立ち上がる。体部外面は全体に叩き整形を施している。

４は須恵器の甕でIV層，Ｖ層，ＳＲ１から出土し、ほぼ完形に近く接合できた。口頸部は外反して上がり、端部を肥厚させる。口頸部及び胴部の外面には全く施文がない。この甕の胴部片がＶ層で出土したときには、土師器の高杯５が共伴していた。



第16図 Ｖ層ＳＲ１出土遺物：復元実測図
（１～３．５　Ｓ＝１／３　４　Ｓ＝１／４）

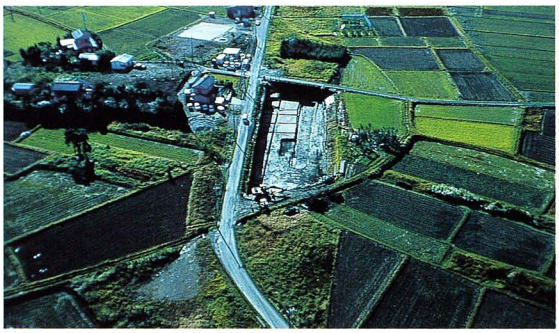
第Ⅴ章　ま　と　め

具同中山遺跡群は、昭和61年以来、数度の発掘によって、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが確認されている。四万十川やその支流域には、多くの遺跡が存在するが、その中でも本遺跡は、古墳時代の祭祀遺跡として全国的にも注目されてきた。昨年度の発掘調査でも祭祀に使用したと思われる鉄剣など、貴重なものが多く出土している。本年度の調査では、弥生時代、古墳時代を中心として甕、壺、高杯、椀、鉢などを中心に約6500点の遺物が出土した。

弥生時代では、Ⅵ層、Ⅵ'層、ＳＲ２から、中期中葉に属する資料を提供することができた。県西部においては、当該期の資料は数少ないが、入田遺跡以来、徐々に弥生時代の土器様相も解明されつつある。今次の資料も、広く四国西南部の弥生期を把握する上での重要な資料となるであろう。古墳時代では、Ⅳ層、Ⅴ層、ＳＲ１から４～５世紀を中心とした遺物が出土している。特に調査区西部中央で出土した土師器の甕は、県西部で出土した土師器の中でも大型のものである。

検出遺構としては、二時期の自然流路、ピット群、杭列などを確認した。自然流路については、本年度調査区においても、昨年度調査区においても確認しており、具同周辺には中筋川に流れ込む自然流路が縦横に存在したものと考えられる。そして、それら流路に沿って小規模ではあるが、頻繁に祭祀を行った痕跡を、広範囲に確認できる。また、これらの祭祀跡は、本流である中筋川に沿って祭祀行為の規模が大きく、支流では小規模ながら頻繁に行われていたという傾向が見られ、その祭祀行為は常に水を冠るような地点での祭祀であり、洪水に関連した水の祭りと考えられてきた。

古代、中世においてこの地域一帯は、外洋から四万十川、中筋川を利用した河川交通の発達した場所で、船戸遺跡などは河津としての機能を有した可能性もある。また最近の調査では、古墳時代でも須恵器等の搬入が確認されており、中村以外の地から製品の流入が見られる点を考え合わせれば、この地域での港に係わる祭祀が古墳時代から行われていたことも考えられる。以上のことから、支流域での祭祀行為と本流域でのそれとが相違する可能性も考えられ、今後考察を必要とする。



完掘状況

完掘状況（調査区西から）

（中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査概報告 III）

具同中山遺跡群 II－1

1996年3月

編集　（財）高知県文化財団
発行　埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437－1
電話（0888)64－0671
印刷　川北印刷株式会社